

中国の秘密結社、裏と表

緒 方 修*

China's Secret Societies Inside and Out

OGATA Osamu

要 旨

中国は、匪賊の国、と言われた時代もあった。広大な土地に賊が散在し、群雄割拠し、後に軍閥が跳梁した。そこをまとめるにはどうするか？ 最初に清朝を倒した孫文にとって、秘密結社との連携は必須であった。革命を成功させるには、砂のように散在する4億の民、海外に流出した華僑などを結合させなければならない。中国正史にはほとんど登場しない秘密結社や匪賊を手掛かりに考察、その表の系譜とも言うべき世界客家大会にもふれる。

キーワード：秘密結社、匪賊、孫文、辛亥革命、世界客家大会、WUB

WUBがめざすべき組織

昨年、沖縄では「世界のウチナンチュ大会」が開催された。1990年の第1回から数えて7回目だ。世界中の沖縄県系移民は約40万人といわれている。事務局によれば、今回の海外からの参加者は7,000名、来場者は期間中に約43万人。日本の移民県として広島、熊本などが挙げられるが、定期的な大会を開催しこれほど県民こぞって歓迎している例はない。特筆すべきはWUB（ワールド・ウチナンチュ・ビジネスネットワーク）が、大会の進展とともに、25年前に設立されたことだ。今回は大会日程に合わせ11月1日に「WUB世界大会in沖縄」が那覇市ぶんかテンプス館で開催された。開会式で佐久田トニー会長は「次の25年に向け、今日から新たな取り組みが始まる。いちゃりばちよーでー（出会えば兄弟）、肝心（ちむぐくる）という、沖縄にある二つの素晴らしい言葉を大切にしていこう」と呼び掛けた。フロアからの発言には華僑・客家のような組織を、という言葉も聞かれた。聞いていて、いったい会場の中の何人が、客家・華僑のネットワークの歴史や、豊富な人材、強大な資金力な

* 沖縄大学客員教授／沖縄大学地域研究所特別研究員 ogata@okinawa-u.ac.jp

どの実態を知っているのか、と疑問を覚えた。

華僑とは、中国に生まれた後、外国に移住した人を指す。学術的には移住国の国籍を取得していない人を「華僑」、取得している人を「華人」と呼ぶ。客家は最強の華僑とも言われ、世界中に約6,000万人とも1億人とも言われる。(BBCの推定で約1億2,000万人という数字も見たことがある)中国の人口は約14億だから客家は多くても7%だ。客家の人口と沖縄県系の人口を比較してみよう。沖縄県の人口約146万人と移民約40万人+県外在住者約60万人?を合わせて約250万人と推定。割り算してみると $6,000 \div 250 = 24$ 、 $10,000 \div 250 = 40$ となる。つまり24倍から40倍の規模である。中国からアメリカへの移民は19世紀で既に30万人を超していた。その大半が「三合会」の本拠地でもある広州珠江デルタの出身だ。広州は広東省の省都であり、客家も多い。

客家はシンガポールの初代首相・リークァンユウ(李光耀)、台湾の李登輝元総統をはじめ、指導者を輩出している。中国、マレーシア、インドネシア、台湾などのメディアやIT関係の重鎮はほとんど客家と言って良い。世界大会は各地で開催されている。沖縄でも誘致シンポジウムを1998年に宜野湾コンベンションセンターで開催したことがある。世界各地の客家は崇正会を作っている。沖縄の久米崇聖会もルーツは同じと見られる。久米三十六姓の始祖は阮国(1566~1640年)。福建漳州府龍溪県の人。WUBがお手本にすべき組織だが、歴史は古く、規模も違いすぎる。客家の会のルーツの一つに、三合会がある。世界史においては、辛亥革命を支えた秘密結社として知られる。中国の清朝を倒し、共産革命の前段を用意した。

白石隆は、シンガポール建国について秘密結社の役割がいかに大きかったかを語っている。

「中国人は秘密結社のネットワークによってシンガポールに到来し、秘密結社に組織されて苦力として中国市場向けに胡椒、ガンベル¹の栽培を行ない、秘密結社のネットワークによって故郷へ送金した。」(「海の帝国」白石隆-中公新書)。これから孫文の辛亥革命へ至る経緯、そして現在も孫文の肖像を掲げて世界各地で開催される世界客家大会を点描する。

「私は三合会の頭目だ」

宮崎滔天全集1の「清国革命軍談」に印象的な場面がある。孫文が革命の意義を唱え、少しずつ周りにも次第に同調者が始まった。しかし肝心の核となって動く集団がいなければ物事は動かない。インテリではなく命知らずの男どもが必要だ。さあどうするか。そこで香港の医学校からずっと一緒に行動していた鄭弼臣(鄭士良)が突然孫文に向かって口を開いた。これまで一つも意見を言わなかった男だ。

「是れだけ同志も増えたり海軍にも陸軍にも大分手が廻っているから、何日(いつ)まで傳道ばかり行って居っても仕方がない。一つ旗学(*旗揚げのことだろう)を行(や)らうじゃ

¹ つる性の木本で、その葉からとれるタンニンをもとにする[ガンビル]は、皮なめし、褐色染料、薬用などに使われる。また十九世紀にはこの葉を煮込んで固めたものがタールの替わりに船板の継ぎ目に水漏れ防止のために使われた。—「海の帝国」より

ないか」と提議した。そこで孫がいふには「まだ足りないものがある。其は何（ど）うしても革命の働きをして急先鋒となる者は、世の所謂（いわゆる）讀書生では駄目だ。何うしても徒手（すで。からて。）よりの野蛮流の革命主義であるけれども三合會を手に入れなければ、初めの立上がりに困るから、是と氣脈を通ずる必要がある」之を聞いて鄭弼臣破顔（にっこりわらう）微笑して

鄭「それは最（も）う既に出来て居る」

孫「何（ど）うして出来て居るか」

鄭「實は私は三合會の頭目だ」

医学校に入っても本一冊読んだことがなく、試験も受けないダメ学生が、なんと秘密結社のドンだった。彼は清朝を打倒し新しい政府を造るにふさわしい指導者を探していたのだ。孫文と付き添い、言動をずっと見ていてこれこそ指導者と仰ぐ人物と見定めた。孫文は、鄭が三合會の頭目である、と聞かされ、百万人の味方を得た気持ちで、革命への道筋を辿り始める。孫文と鄭弼臣（鄭士良）は広州の博濟書院（後の香港大学医学部）で知り合った。「鄭士良も洗礼を受けたキリスト教徒で、清朝を打倒して明朝を復興する、いわゆる反清復明（はんしんふくみん）をむねとする秘密結社三合會の有力な会員であった。孫文は鄭士良を通して秘密結社の内容を知り、後日、革命運動で秘密結社と連絡をとることが出来た。」（世界の名著64 孫文・毛沢東—中央公論社）

秘密結社としては有名な哥老会（かろうかい）がある。「三民主義」によれば—そのころ珠江（しゅこう—江西省、広東省を流れる川）流域に散在していた会党を三合會（さんごう會）と称した。また長江に散在していたのを哥老会（かろうかい）といった。哥老会の頭目を大竜頭（ターロントウ）といていた。—（三民主義 上 岩波文庫 民族主義第3講）

水滸伝や三国志の時代を思い出させる。そもそもこの地域の軍隊全員が哥老会の会員なのだから、連絡も運輸も進軍も全てが思いのまま。軍隊の組織よりは秘密結社としての行動力の方が上なのだ。孫文が例に出したのは左宗棠（さそうとう）の例だ。彼は曾國藩と並び称される清末の官僚で、新疆の回教徒の反乱を討伐したことで知られる。彼は幕僚から次のように告げられたのだ。「われわれの軍隊は、兵隊から将官にいたるまで、全部哥老会です。（略）もしこの軍隊を維持しようと思うならば、閣下にも大竜頭になっていただかなければなりません。閣下がもし大竜頭になることを承知なさらないなら、われわれは新疆に押しだすことは不可能です。」

辛亥革命以降の混乱期に活躍した青幫（チンバン）、紅幫（ホンバン）の名前も軍隊から来ている。ともに1949年の革命までつづいた秘密結社。紅幫は哥老会系で、太平天国軍や湘軍の残党を中心としてはじまったものだ。青幫は運輸労働者を中心に、清初から存在した宗教結社の系統であるという。のちには密輸などに従事する暴力団的な組織になってしまった。とくに青幫と国民党右派との結びつきは有名である。—以上は同書の解説より。

孫文の革命組織づくり

孫文の辛亥革命はすぐに成功した訳ではない。10回の失敗の後ようやく成就した。度々、同志が殺され、自らも海外に逃れ、亡命生活を続けながら倦まずたゆまず革命を説き続けた。生涯を振り返れば一瞬の輝きの後、再び失意のうちに世を去ることになる。「革命未だ成らず」の語を遺して。しかし清朝を倒した功績は永遠に残る。ちょっと話が先走り過ぎたようだ。

毛沢東は孫文の死(1925年)の2年後、「湖南省農民運動視察報告」に次のように記している。「封建的な宗族結合にのっかった土豪劣紳、不法地主の階級は、数千年来の専制政治の基礎であり、帝国主義、軍閥、腐敗官僚の土台であった。この封建勢力を打倒することこそ、国民革命の真の目標である。孫中山(孫文)先生が国民革命に尽力されること四十年、やろうとしてやれなかったことを、農民は数カ月のうちにやりとげたのである。」(略)

「革命の同志たる者はみな、国民革命には農村の大変動が必要であることを知らねばならない。辛亥革命は、このような変動がなかったがために失敗した。」

孫文は農民にまで視線が届いてなかった、と言わんばかりだが、果たしてそうか。孫文は康有為に比べ清朝の高級官僚でもなければ、中国で名前が売れていた訳でもない。広東省の海賊、と呼ばれたこともある。ロンドンで清の大使館に幽閉され、その手記がベストセラーになり、知られるようになった。が、お尋ね者のうさんくさい人物と思われていた。だからこそ孫文は自らの考えを浸透させるための「工作」には、最大の努力を傾けたはずだ。

当時は「世論」などはない。砂のようなばらばらの「四億の民」をまとめる戦略は？ まずは宗族だ。父系の同族集団が最初の手掛かりとなる。孫文もマウイ王と呼ばれた兄・孫眉にずいぶん助けられている。しかし身の回りの親戚や友人だけで革命が達成されるはずはない。

農村や軍に浸透した秘密結社が、鍵を握る、と見抜いていた。

「しかし何よりも孫文派の活動の特徴づけるのは、中国における伝統的な民衆反乱の系譜を引く武装蜂起路線であり、その点において同時期の他の変革運動と決定的に相違した。」(結社が描く中国近現代—結社の世界史2—山川出版社)

毛沢東は「革命は銃口から生まれる」と言った、そして前述のように国民革命は不徹底なために「農村の大変動」を起こせず、失敗したと決めつけている。しかし同書によれば「清末民初の革命家孫文は、このことを中国共産党による農民革命のはるか以前に感得し、実践していた。」とも評価している。

匪賊という集団

当時の中国の農村の状況は悲惨だった。近代中国の辺境と中央、という副題を持つ「匪賊」(フィル・ピリングスリー—筑摩書房)という大著には「半農半賊」の例や、兵士がそのまま賊になる「兵匪」の例が多数紹介されている。こうした「ならずもの」「ごろつき」等の無法者集団が、はからずも革命の最先端に立った場面があったことは間違いない。匪賊は特に辛亥革命以降に目立った。だから匪賊が革命を起こした、とは言えない。かえって1949年

の人民革命（これが現在の中国の起点）では共産軍は激しく匪賊を攻撃した。これも主導権争いといえればそれまでだ。毛沢東を大盗賊の頭目とする見方もあるくらいだから、組織・軍事・宣伝能力などすべてに優れた「大盗賊団」であった。匪賊は少数派、乱立、規律なし、墮落などの理由で駆逐された。

河南省の例を挙げよう。

「1921年から翌年にかけて華北を襲った大飢饉は、それ以前の数年におよぶ洪水と旱魃のくり返しの果ての惨禍であった。百万人単位の死者を出し、無一物の被災者数千万人を残したこの飢饉ひとつをとっても、河南の農村経済がいかに脆かったかがよくわかる。過去においてもこの地は、不順な気候に災いされるたびに農民反乱をくり返してきた。いま同じ自然災害が新たな匪賊を大量に生む引き金になる。」こうして若い男は兵隊か匪賊になる、という状況が生まれる。

「政治が腐敗し、行政の無策が際だつようになると、思いあまり、意志を固めた人びとが、かねてから心を惹かれていた山や湖沼に、すなわち昔からの匪賊の根城に、身を投じるようになる。」これは河南省ばかりでなく中国全体にあてはまりそうだ。「辛亥革命から一〇年も経ずして新聞は中国を『民国』と言う代わりに『匪国』というありさまだった。」

この本には注にあるように「匪賊に捕らえられ、さいわい生き延びてその体験を語ることができた人びとの覚え書を重要な情報源にしている。」特に外国人が人質にされた例は、国際問題に発展し広く海外でも報道された。マレーネ・ディートリッヒ主演の「上海特急」は1932年にアメリカで制作された。内戦状態の危険な状況を走り抜ける豪華旅客列車、外国人乗客の誘拐がそのまま「匪賊たち」の利益につながった。この映画は1923年に起きた「臨城事件」以来、頻発した外国人誘拐事件がモデルとなっている。山東省南部の臨城で、天津―浦口線を走る豪華旅客列車「ブルー・エクスプレス」が「1,000名規模の匪賊集団の襲撃を受けて脱線した。」「しかも300人に達する乗客が賊に連れ去られ、そのなかにおよそ30人の白人が含まれているというではないか」

人質をかかえて山中にたてこもった賊集団は数々の要求を突きつけてきた。

政府軍が山東省から撤退すること。

関係者全員を罪に問わないと公式に宣言すること。

再編入および新規の編入を希望する者を正規軍に受け入れること。

これらの要求の実現を6カ国の外国政府が保証すること。等々。

つまり列車強盗団による、自分たちを正規軍に入れてくれ、という要求だ。とんでもない話だが、これがなんと認められたのだ。仲介したのは上海青幫（チンパン）の大立者、杜月笙（ドゥユエション）。事件から2カ月後、身代金85,000万元で人質の放免が合意された。もちろん杜がどれくらいかすめたかは分からない。ともあれ賊は身代金を手にした。その上「およそ3,000人の賊徒が軍に編入され、最高指導者の孫美瑤（スンメイヤオ）をはじめとする頭目たちは将校に任じられた。盗賊たちは3,000人も同時に！ 正規軍の兵隊に！ リー

ダーたちは将校！ に成り上がることが出来た。以後、「中国全土で外国人が匪賊に襲われる事件が激増し、列車転覆の企てがふたたび流行を見ることになる。」

「公務員になるにはまず列車強盗から始めよ」という格言が成り立ちそうだ。実際に「臨城事件の賊集団が列車転覆の現場から逃亡する際には、近辺の村人が湯茶と豆汁の朝食を道端に供しておいた（賊徒の側でも食器類をその場にきれいに重ねて立ち去った）。」

村人たちは「大列車強盗団ご一行様歓迎」(?)の意を尽くした。親たちは、息子たちがはやく立派な「賊」となってその後は正規の軍人として出世街道を歩むことを願ったに違いない。

「曾國藩」(岡本隆司－岩波新書)の帯には、「匪賊の国」を生きる、死者数千万人－世界史上最悪の内戦を平定した男の実像、とある。曾國藩は太平天国の叛乱を葬った英雄、天才と称される。彼は大乱をまねく原因は農夫を大事にしないからだ、と強調した。「軍兵は食糧がなければ、必ず民から奪い、庶民は食糧がなければ、必ず身を匪賊に投ずる。匪賊に食糧がなければ、必ず各地転々とする流賊と化し、大乱もいつ果てるともしれない。」

上海の骨董市で太平天国の発行した円い硬貨を手に入れたことがある。真中に四角の穴が空いていて時計回りに太、平、天、国、という字が並び、青さびていた。こうした通貨が流通するくらいの「匪賊の国」が短い期間だが存在した。

第二の「太平天国」

太平天国のリーダー・洪秀全の活躍を子どもの頃から聞きながら育った人物がいる。孫文である。彼は洪と同じ客家だ。清朝の打倒をめざした自らの事業を第二の太平天国と名付けていた。清朝側は太平天国を「粵匪」と呼んだ。粵(えつ)とは広東をさす。中国南部を中心にした賊、という認識だ。

なお客家に対して「煤匪」という蔑称があることを「客家と中国革命」(矢吹晋・藤野彰－東方書店)で知った。広東省嘉応州は客家の居住地区として知られる。「嘉応州梅県は省内最多の鉦区が確認され、嘉応州の石炭はこの地を特徴づける重要な鉦区資源であった。鉦山を開くと無業の民が集まり、閉山するや失業者は匪賊となるので、官憲は由来『煤匪』(客家は鉦山技術者集団の側面があり、このように呼ばれた)による反乱や石炭私掘事件に目を光らせた。広東・広西・福建三省境界や嘉応州において、官憲が初めて『客家』の語を使うのは、光緒年間(1875～1908年)であった。」(同書より)

煤煙にまみれた鉦山労働者の群れ、彼らは閉山となれば直ちに匪賊となって、地域を荒らし回る・・・。広東・広西・福建の州境には官憲の目は行き届かない。

広東省嘉応州梅県から福建省永定までバスで通ったことがある。永定には有名な客家円楼がある。巨大なバウムクーヘンのような形の集合住宅で2008年には「福建土楼」として世界遺産に登録されている。広東省梅県から福建省永定一帯の住民は97%が客家人。広東省嘉応州の嘉応大学には客家研究所が造られている。客家人の故郷、と言っても良い。ここで初めて客家世界大会が開かれたのが、1994年12月のことだった。

中国の改革・開放の動きを先取りするように、広東省の山奥・梅県での開催が決まった。中国大陸のアンテナ、世界への窓口として機能している香港、その都市を抱え込むように控える広東省、奥座敷にあたるのが客家の故郷・梅県だ。当時の広東省の知事は客家の葉選平。葉剣英の息子だ。父・剣英は日中戦争の時の八路軍の参謀長、中国共産党の軍事・政治面での最高指導者の一人。この梅県出身だ。ほかに客家の有名人といえば洪秀全、孫文、鄧小平、李登輝、リークエンユー（李光耀）と、たちどころに出てくる。傑出した女性たちもいる。秋瑾、ハンスーイン（韓素音）、エイドリアン・クラークソン（伍冰枝）。秋瑾は革命家。孫文の中国同盟会に所属し、31歳で処刑された。武田泰淳の小説「秋風秋雨人を愁殺す」に描かれている。ハンスーインは「慕情」の作家。映画ではジェニファー・ジョーンズとウィリアム・ホールデンが主演し、大ヒットした。主題歌の「Love is a Many Splendored Thing」（ナット・キング・コール）は映画音楽史上屈指の名作といわれる。エイドリアン・クラークソンはカナダ総督。広東省から来た難民の娘と報じられているが、客家であることは意外に知られていない。

革命家、作家、国家元首。なろうとしても簡単になれるものではない。理想を求める力、夢を描く力、実践する力、が強い性格だったのだろう。客家の女性は昔から纏足をしない。台湾出身の古い世代の客家から「そんな贅沢はしていられなかった」と聞いた。男と同じように畑を耕し、さらに家の仕事を取り仕切ってきた。「大脚婆」（大足の女）という悪口もある。男女平等の基本、教育、期待される目標が、彼女たちに影響を与えた。客家的考えというのがあるのか。それが傑出した人物を輩出する一つの要因になったのか。そして客家の組織そのものに優れたリーダーを生む特性が潜んでいるのだろうか。

革命家・秋瑾について記した文を紹介する。「秋瑾は浙江同郷会で知りあった王時沢を通じて、日本留学後ただちに三合会に加入していた。『同郷』ネットワークから『秘密結社』ネットワークへ、そこからさらに反清政治結社へ——秋瑾のこうした軌跡は、本質的にネットワーク社会であった中国において、反清政治活動もまた、そのようなウェブの交錯を経て急速に広域化、組織化されていった事情を示唆するだろう。事実、秋瑾はこののち浙江「同郷」ネットワークを反清政治活動の目的に向けて糾合してゆく」（山田賢『中国の秘密結社』（講談社選書メチエ）の第4章「革命前夜」から）。

この本には、人が秘密結社・原「天地会」に入る理由を次のように述べている。「移動する人びとが不断に流動しつつ、常に相知らぬ（つまり油断ならぬ）他者と遭遇する荒々しい競争的な社会のなかで、いかにしてリスクを回避し、安全保障を獲得したら良いのか。『天地会』はまさにこのような不安の一部を解消した」。著者は、原「天地会」は「白蓮教系宗教結社の川下に位置する相互扶助ネットワークであると、ひとまずは規定」している。この会は、入る時に加入儀礼と誓約を伴い、内部を「秘密」の障壁により遮った（略）。もし会の秘密を漏洩することがあれば「死は刀剣の下にあり」——すなわち死をもって贖わなければならない。会の兄弟たちを認識する暗号は、例えば以下のようなものがあつた。「茶・煙

草をやりとりする際に中指を出すこと、行路で盗賊に襲われた時にやはり中指を胸に当てることであった」。しかし、こんなささいな身ぶりがそんなに重大な秘密なのだろうか。著者は、「秘密」とはまなざしからの消滅ではない。むしろ何か「秘密」にされていることを演出し、周囲のまなざしと関係を取り結ぶ行為なのである、と強調する。つまり秘密の中身を探ろうとすればするほど、「あらかじめ仕組まれた迷宮のワナに私たちもまた囚われることになるだろう。」と記す。

例えば「白蓮教」でウィキペディアを探れば「ほかの人はこちらも検索」と出てくるのは以下のキーワードである。中国同盟会、義和団、洪門……。あとは怪しい宗教団体ばかり。洪門の項には、コンパスと定規を組み合わせたシンボルが載っている。すなわちフリーメイソンのマークだ。さっそく迷宮のワナにはまりそうだ。ただし洪門の解説は冒頭を除いては要点を押さえている。「アジアフリーメーソンは〔洪門をこのように説明するのは疑問―緒方〕、清末初に民間で結成された秘密結社。これは対外的には天地会と呼び、内部では洪門と呼ぶ。中国で明朝末期から清朝初期に興った秘密結社。明の相互救済組織はやがて“反清復明”（清朝「女真族／満人」異民族支配を倒し明朝「漢民族」を復活させる）趣旨へと変わってゆく。

秋瑾が入会した三合会は天地会が名を変えたものであった。やがて彼女は「光復会」、その後「中国同盟会」にもただちに加わっている。中国同盟会は1905年、東京で結成された。

「1905年7月、ヨーロッパから日本に到着した孫文は、宮崎滔天の仲介によって黄興らと会談、彼らは各出身地別に結成され活動していた反清政治団体の連合に合意した。ここにおいて広東の孫文をリーダーとする『興中会』、黄興のもと、湖南人脈に培われた『華興会』、さらに浙江出身者を多数擁していた『光復会』のメンバーも一部加わり」中国同盟会が成立した。目的は「韃虜（だつりょー清朝）を駆逐して中華を回復し、民国を創立して地権を平均にする」。総理には孫文が推された。

現在でも、崇正会（客家の会）の総会会場には常に孫文の写真が正面に大きく掲げられている。客家の象徴的人物として中国・台湾双方から尊敬されている。中国からは「近代革命先行者」（革命の先駆者）として、台湾からは「国父」として。

秘密結社員との接触

秘密結社は中国の正史に登場することはほとんどない。例えば三合会について、講談社の「中国の歴史10ラストエンペラーと近代中国」（菊池秀明）を見てみよう。138ページに次のような叙述がある。

「また孫文の竹馬の友だった陸皓東（りくこうとう）を初めとして、医学生時代に『四人の謀反人』を名のって共に革命を論じた陳少白（ちんしょうはく）、孫文と秘密結社である三合会（さんごうかい）との橋渡しをした鄭士良（ていしりょう）などは、みな香港のミッションスクールに学んだクリスチャンだった。キリスト教を帝国主義の手先と考えてきた中国の歴史学界は、現在もこの事実に触れたがらない。」

キリスト教は中国の正史から疎んじられている。まして秘密結社が清朝を倒した辛亥革命の重要な役者だったことは後の中国共産党の歴史からは隠ぺいされている。客家も「客家隠し」と指摘されるくらいに歴史に埋もれている。客家については別項を設けて紹介する。

秘密結社のメンバーが自分の組織について明かすことはない。しかし例外もある。錦正社という出版社から「洪門人（こうもんじん）による洪門正史—歴史・精神・儀式と組織」という本が出版された。私がこの本と出会ったのは2007年11月3日、東京大学駒場キャンパスで開かれた「清末中華民国初期の日中関係史—協調と対立の時代 一八四〇—一九三一」（日中関係史主催）の席であった。入口に設けられた書店の出店で購入した。研究会終了後すぐに新橋のコーヒー店の屋外テーブルで読みふけたことを思い出す。3週間後、私は台北に飛び、著者の阿部英樹氏に会っていた。思い立ったが吉日、直情径行、走ってから考える（あるいは考えない）のは私の性癖でもある。

台北の国賓大飯店の喫茶ルーム。以下は私の書いた安倍氏の著書「不良のタオ」（講談社）の「解説—安倍秀樹という男」より。

「ハゲ頭に鋭い眼。不良ですから、という言葉が盛んに出てくる。『洪門は一人ひとりがそう主張すれば通る。たとえば安倍山（ざん）、緒方山（ざん）と唱えればよい。もちろん儀式は無理だが。他のメンバーがそれで認めればOKだ。ヤクザの組は勝手に名乗ることなどできない。洪門はそこが違う。台湾だけで百いくつかの支部がある。一九九八年の洪門大会以来、世界大会は開かれていない。現在、和平統一促進大会となり、中国側の意向一辺倒になっている。』」

「『孫文が宮崎滔天と相通じたのは道（タオ）である。二人とも財産を残さず、すべてを使った。孫文が亡くなる時、革命未だならず、といった。案外、満足して逝ったのではないか。…せっかくいらしたので、本来は食事でも差し上げたいが、現在困窮している』竜巻のように安倍氏は消えた。」

解説には詳しく書かなかったが、武術の極意や手当の話をした。合気道の極意は、宇宙との調和である。手当は当時はまっていたレイキ・ヒーリングや道教の神々の話をした。安倍氏は1955年2月11日生まれ。その後接触はないが、現在（2023年2月）では68歳だ。いまだに「不良のタオ」を続けているのだろうか。

洪門という言葉の説明が後になった。ウィキペディアによれば、「洪門は中国明朝末期清朝初期に興った秘密結社。“反清復明”（清を倒し明を復活させる）を主旨とする。洪門とはすべての山堂および反清を纏めた総称であり、それは天地会、三合会（三点会とも）、致公堂、あるいは紅幫など多岐にわたる。対外部には「天地會」、対内部「洪門」と呼称しているといわれている。鄭成功を教祖と仰ぐが、実質は陳永華によるという伝承がある。」（一部略）

緑林—窮民を集めた盗賊

緑林という言葉がある。デジタル大辞典によれば、「1 青青とした林、2 <前漢の末

期、王莽（おうもう）の即位後、王匡（おうきょう）・王鳳（おうほう）らが窮民を集め、湖北省の緑林山にこもって盗賊となり、征討軍に反抗したという、「漢書」王莽伝下にある故事から「盗賊のたてこもる地。また盗賊。」前漢（ぜんかん）といえは紀元前206年～208年。なんと2200年以上も前から緑林は存在した。前漢は「秦滅亡後の楚漢戦争（項羽との争い）に勝利した劉邦によって建てられ、長安を都とした。」（ウィキペディア）・・・ということはお劉邦が建てた王朝は盗賊王朝ということにならないか。

実際にそのような論旨でまとめられた本がある。「中国の大盗賊・完全版」（高島俊男—講談社現代新書）である。はじめに、で中国のある学者から聞いた話を引用している。

「中国歴史上の二大勢力は『紳士』と『流氓（りゅうぼう）』だ、と言っている。紳士は知識人であり、これが官僚になり政治家になって支配層を占める。流氓とは無職のならず者のことで、これが徒党を組んで盗賊になる。中国の歴史は、この紳士と盗賊とが、対抗したり連合したり、あるいは一方が他方を従属させたりした歴史だ、と言うのである。」

同書によれば、日本語と中国語では盗賊の意味が違う。日本語ではコソコソちょろまかすようなイメージだが、中国語の盗は「堂々」、「公然」である。盗賊の基本的要件は「一、官以外の、二、武装した、三、実力で要求を通そうとする、四、集団」。続いて大事な指摘をしている。「官より見れば、山賊夜盗であろうと、世直し集団であろうと、徒党を組んで不逞をはたらき、既存の秩序をみだす点では少しもちがわない。いや山賊夜盗は百姓を困らすだけで天下の大勢に影響ないが、世直し集団は、体制そのものをひっくりかえそうというのだから、官よりみれば、こっちのほうがいっそう悪質である。」「『正義』とか『悪』とかいう価値は、それを見る人の立場による。そして「盗賊」というのは、「官」のがわから見た呼称なのである。」

やがてこうしたアウトローたちは駆逐されてしまう。「中国革命を駆け抜けたアウトローたち」（福本勝清—中公新書）のあとがきには次のように記されている。

「一九四九年十月一日、中華人民共和国の成立が宣言され、民国の時代に終焉が告げられた。民国を埋め尽くしていた軍閥、土匪、紅槍会、太刀会などの会門は、急速に歴史の舞台から退場していった。（略）同時に土匪もことごとく掃討されていった。一九四六年四月、再び国共内戦が勃発した時、土匪たちは一斉に国民党につき、共産党軍を攻撃した。中央軍の招撫にあずかり、正規軍となる夢を実現させたのだった。だが、すでに民衆の間に根をおろし、地方のすみずみまで力を及ぼすにいたっていた共産党は、傘下の地方軍や民兵を中心として土匪掃滅作戦を展開、民衆と一体となって土匪を追いつめ各個撃破していった。」

匪賊の時代は過ぎ去った。しかし著者は次のように指摘する。「八〇年代以降、徐々に古い中国が」復活しつつあるように見える。幫会は黒社会（ブラック・ソサイアティ）となって中国のいたるところにはびこるようになっていく。」

宗教集団の出現、土匪まがいの行為が起こっている。

「人民中国の皮を一枚めくれば、民国が顔を覗かせる」と。

世界客家大会探訪記

孫文の辛亥革命に力を発揮した三合会は、思わぬところにも名前を出している。

『14K』、『和盛和』、『和安楽』、『新義安』だ。各派ともメンバーをロンドンやイギリスの主な地方都市に住まわせている。」これはスパイ小説で有名なブライアン・フリーマントルのノンフィクション「ユーロ・マフィア」（新潮文庫・上下）に書かれている。新しく出来たEU域内でも三合会が存在し、しかも四派の存在が確認されている。もちろん名前は100年前と同じだが、EUにはびこるのは暴力組織で、以前と同じ三合会ではない。しかし秘密結社には変りない。

世界客家大会は三合会のような秘密結社ではない。中国と台湾双方で指導者あるいは国父として扱われている孫文を象徴としている。強力な影響力を持つ客家が世界規模で開催している大会なので、日本でも一時注目された。私は8年間何度も世界大会に参加し、日本の崇正会にも毎回顔を出した。既出のレポートを含むがその一部を紹介する。

客家の世界大会は原則として隔年ごとに世界各地で開催されている。「世界客家大会」の歴史を簡単に振り返る。

1971年第1回香港、1973年第2回台北、1976年第3回台北、1978年第4回サンフランシスコ、1980年第5回東京、1982年第6回バンコク、1984年第7回台北、1986年第8回モーリシャス、1988年第9回サンフランシスコ、1990年第10回マレーシア・サバ州、1992年第11回台湾・高雄。

私は次の第12回（1994年）から参加した。第12回中国広東省梅県。広東省は中国では最も早く海外との交流が進み、改革・解放のトップを走る省だ。このへんの事情は拙著「客家見聞録」（現代書館）に記したので省く。第13回シンガポール、第14回台北、第15回マレーシア・クアラルンプール、第16回中国福建省龍岩、第17回インドネシア・ジャカルタ。この6カ所を1994年から2002年の8年間に訪れた。地名を詳しく書くと、第14回は台湾北西部の苗栗（ミャオリー）県、第16回は福建省福州から4時間車を走らせた山麓の永定区、第17回は大会後、カリマンタン島の州都ポンティアナックまで足を伸ばした。インドネシアのポンティアナックは赤道線が横切る記念碑で有名だが、近くのマンドールにかつて蘭芳公司（ランファン・コンス）があった。蘭芳共和国として1777年から1888年にかけて存在した。リーダーの羅芳伯は広東省梅県出身の客家人。アメリカのジョージ・ワシントンが初代大統領に就任したのが1789年だから、世界初の民主的な政権と言われている。

世界客家大会が開催された各地では、国（地域）のトップが出席した。中国広東省梅県では葉選平（元広東省長—人民解放軍の英雄・葉劍英の息子）、シンガポールではリーシェンロン＝李顯龍（副首相・後に首相—元首相リクエンユー＝李光耀の息子）、台湾では李登輝（中華民国総統）—ここまでは全員客家人。マレーシアではマハティール（首相）、中国福建省龍岩では習近平（福建省長—後に国家主席）、インドネシアのジャカルタでは副首相や客家がルーツの大臣が出席した。開催国が客家大会の重要性を認識し、世界とのネットワーク構築のために最大限に努力していることが分かる。

この間の世界大会について短く報告する。

(1) 第12回：1994年12月：中国広東省梅州市梅県—40カ国（地域）から1,700人参加

（客家円楼は福建省の山奥に建っている。中ソが軍事的緊張関係にあった時、NASA〔米航空宇宙局〕が、当時ソ連にあったミサイル基地と同じようなものを見つけた、という話があった。拙著『客家見聞録』（現代書館）にも記した。ところが2000年に再び現地を訪れた際、ガイドが、対ソ攻撃用のミサイル基地がある、と大騒ぎになったそうです、と解説していた。国際的デマ（？）振りまきの責任の一端は私にもありそうだ（笑）。）

中国での世界客家大会開催の背景：第12回大会は1994年の12月、場所は中国広東省梅州市梅県。中国での初開催がこの時期で、場所が広東省梅県であったことは象徴的だ。中国の改革開放政策が1980年代から本格的に進んだ。香港の後背地である広東省深圳を始め全土が「香港化」してゆく。深圳の何もない漁村に高層ビルが建ち始め、90年代には開発を始めようにもトホウに暮れる（日本人研究者の談話より）と言われた上海浦東（ほとう）新区を中心に長江開放地帯が作られてゆく。94年、世界の客家を招いて開催予定の大会は、これらの改革開放政策がインフラばかりでなく、ソフトパワーの強化までがいよいよ目に見える形になった、と実感した。

梅県で世界大会が開催される理由は、住民の97%が客家であることだ。客家語もこの地域の言葉がスタンダードになっている。世界各地に散らばった客家の故郷なのだ。『ジャパン・アズ・ナンバーワン』で有名なエズラ・ヴォーゲルの「中国の実験—改革下の広東」（日本経済新聞社—1991年）では、貧しい梅県の実情を垣間見ることが出来る。「梅県の人びとはほかの地方よりも、根や葉を多く食べ、食べる肉は少なかった。人々は古着をタオルとして利用するので、タオルを売っている店はなかった」。私が訪ねたのはこの本の刊行から3年後、あまり状況は変わっていなかった。

(2) 第13回：1996年11月：シンガポール（2,500人参加）

シンガポールは国際大会に慣れている。前回の中国広東省梅県のように小学生が並んでファンイン！ファンイン！（歓迎！歓迎！）と沿道で旗を振ることもなければ、大会に間に合わせて作ったばかりの競技場でマスゲームを披露することもない。

* 2年後、立て続けに参加した4つのイベントがある。客家パワーを生かせば沖縄も国際デビューが可能ではないか。そう考えて1998年に沖縄コンベンションセンターで「世界客家大会誘致推進シンポジウム」を実施した。

- ・ 1998年3月17日沖縄で世界客家大会誘致推進シンポジウム
- ・ 1998年9月25日香港で全球客家代表者会議
- ・ 1998年10月1日中国国慶節
- ・ 1998年10月10日台湾国慶節

9月25日から3週間間に、香港、中国、日本、台湾と駆け回った。10月1日と10日、中国と台湾の国慶節に両方参加する客家のVIP達も間近で見ている。彼らは両方の政府から招待されている。中国にも台湾にも投資している面々が、海外国籍を活用して影響を及

ぼしている、と推測した。

(3) 第14回：1998年10月6日～9日（翌10月10日は台湾国慶節）

台北（2,200人）台湾での開催は5回目

(4) 第15回：1999年11月：マレーシア・クアラルンプール（1,200人参加）

マレーシアは19世紀最大の錫（すず）の産地だった。マハティール首相の演説の中に、錫工業の創始者・葉亜来の名前が挙げられていた。会場は錫を発掘した巨大な跡地に建てられたホテルであった。全体がアミューズメントパークとなっていて、総会も写真撮影もそのホテルで行われた。しかし参加者も少なく、集合写真を見ると数十人しか映っていない。これまで多い時には1,500人以上が全員で並び大騒ぎで撮影していたのに。世界大会の度に郷情報告や客家研究の成果が、少しずつ各団体から配布されるようになった。大会開催が研究を促進している。

(5) 第16回：2000年11月：中国・福建省龍岩市（14カ国・地域代表3,000人—中国では2度目

台湾からは国民党副主席（後に名誉主席）呉伯雄以下200人が参加した。呉伯雄は11日間の予定で一行を率いて大会の後、北京などを歴訪した。恰幅が良く、頭は見事に禿げている。田中角栄元首相の盟友である政商・小佐野賢治を上品にしたような感じだ。台湾新竹州（現・桃園市）生まれの客家。福建省滞在中に省長の習近平としっかり話合ったことは間違いない。台湾と福建省とは昔から深いつながりがある。ちなみに沖縄の3都市は福建省と友好都市締結している。

- ・1981年、那覇市と福州市
- ・1988年、浦添市と泉州市
- ・1995年、宜野湾市と厦門（アモイ）市

この大会の翌年、習近平は沖縄県を訪問し当時の稲嶺県知事と会談している。中華人民共和国創立以来、国家主席で二度も沖縄訪問経験があるのは習近平一人だけだ。その前に那覇市と福州市の友好都市提携の際にも、来沖している。

(6) 第17回：2002年11月：インドネシア・ジャカルタ

これ以降の世界客家大会は10年間、途中台北開催があったが、なんと7回にわたって中国大陸で開かれた。私は急に興味を失い、ジャカルタ大会以降は出席していない。

- ・2003年、第18回河南省鄭州
- ・2004年、第19回江西省贛州
- ・2005年、第20回四川省成都
- ・2006年、第21回台北
- ・2008年、第22回陝西省西安
- ・2010年、第23回広東省河源
- ・2011年、第24回広西・北海
- ・2012年、第25回福建省三明

その後は、『客家～歴史・文化・イメージ～』（現代書館—飯島典子・河合洋尚・小林宏至）によれば以下の通り。

- ・2013年、第20回ジャカルタ
- ・2014年、第27回河南省開封
- ・2015年、第28回台湾新竹
- ・2017年、第29回香港

さてもう一度2002年のジャカルタに戻ろう。カリマンタン（昔はボルネオといった）島西部のマンドールに世界最初の共和国と言われる蘭芳公司在存在した。10人の大統領が107年間にわたって統治した。初代大統領（大唐総長）は広東省出身の羅芳伯という人物だ。国名の蘭は、シンガポールの国花として残っている。シンガポールは多民族国家だが、実質的には客家系中国人の作った「第二の蘭芳公司」と言われることもある。

蘭芳公司についてはほとんど日本語では情報はなかった。唯一、高木桂蔵氏の『客家』（講談社現代新書）で触れられているくらいだ。

太平天国やシンガポール、蘭芳公司の建国、世界客家大会開催など、客家はこれと決めたことを実現する能力に長けているようだ。司馬遼太郎の『街道をゆく四十・台湾紀行（朝日新聞社）の一節を引用する。

「客家は現実を客観視する、(中略)宙空にある自分の視点を頑固に守るともいわれている」。鄧小平、李登輝、リークァンユーなどの優れた指導者を生み出す土壌は、こうした「遺伝子」と関係があるかもしれない。

世界客家大会を開こうという発想は、まず香港で生まれた。その後、大会はモーリシャスなどでも開催されている。客家のこうした交流は、政治的議論を避けて、客家山歌、料理、服飾などの伝統の強調が目立つ。大会では客家の海外雄飛を描いた「ミュージカル」の公演、オーケストラによる「交響曲・客家」まで演奏されたこともある。人の交流・文化の再生によってつながりを深めようという動きが進行している。

太平天国では国家形成の客家の夢は破れた。しかし、蘭芳公司は？ シンガポールは？

国を超えたところで、客家の構想力は生きている。国の指示や補助を得た大会ではなく、客家大会のような各国の客家たちの民間の集まりが続けば、次第に交流の実が上がって来るだろう。東アジアにおける平和構築の一つの試みとも言える。

本文で紹介したほかに『客家の創生と再生』（瀬川昌久・飯島典子、風響社）、拙著「客家見聞録」、「世界客家大会に行く」（ともに現代書館）を全体の下敷きにした。

最終章は日中社会学会「21世紀東アジア社会学」第11号別刷特集冊子の拙稿より一部引用した。

*なお、この節は2003年の沖縄大学地域研究所所報に掲載した拙稿を読み返しながら書いている。タイトルは「蘭芳公司——2世紀前の客家の共和国を求めて」。